

砂名の ベトナムに乾杯

第39回 それでも日本を好きでいてくれますか？

【蔵 KURA】Kaku-Uchi & SAKE Shopでアルバイトをしていた女子学生のNganから「4月からインターンで日本に行きます♪」と報告があったのは、一月半ばのことでした。働き者で良く気が付く彼女が抜けると、当店にとっては痛いのですが、日本に行きたがっていましたから、採択されて良かったです。

今や日本は、ベトナムの若者たちが目指すのに、必ずしも良い国とは限らない、と言われてます。なぜなら技能実習で三年いても、日本語が上達しない、何の技能もキャリアも積めない、ベトナムに戻っても仕事がない、高い保証金の返済に追われ、さらに待遇の悪い雇用先から脱走し、犯罪に走る人も増えているそうです。「技能実習」の実体は、目先の金を得るための単なる出稼ぎで、日本人がやらない単純作業やキツイ仕事を繰り返すだけの毎日。何の技能も知識も教えられず、身に着ける機会も時間も与えられない。それでもベトナムにいるよりは、はるかに稼げ、田舎に仕送りできるし貯金もできる。

たまたまテト中に「アインが見た、碧い空。：あなたの知らないベトナム技能実習生の物語」を読みました。著者の近藤秀将氏は特定行政書士、社会学者、小説家で、ベトナム国立フエ科学大学の特任教授です。アジア圏のイミグレーション法務、在留資格関連申請手続等の活動をしておられます。本作品では、行き詰まる



グループワークで、日本文化を熱心に勉強する学生さんたち

実習生たちの挫折と再起を描く「小説」部分と、著者による「解説」の両面から、技能実習制度の本質が描かれています。実写映画『縁の下のイミグレ』(なるせゆうせい監督作品、2023年公開)の原案作品でもあります。一時的な金銭を得るために、彼らが犠牲にしたものは大きい。そして、そうさせているのは一体誰なのか？それは「日本」であり、経済的豊かさを支えるための負の部分金を金で贖おうとする「日本人であるあなたであり、私である」、と小説からは読み取れるのですが、ベトナムの経済的格差、送り出し期間の搾取、日本人を雇えない中小企業の疲弊、日本経済の低迷、なども要因でしょう。

一方ベトナムで現地採用の日本人女性たちが数年経って、このまま仕事か結婚か？岐路に立たされた時、キャリアが積めていない、会社から何の期待もされないと聞かされることがあります。ですが私が20代の頃から、もはや日本では新人を育成できないと言われていました。

一方、技能実習では金を稼ぐためと割り切って、借金完済、貯金も出来て「成功組」になったベトナム人たち。日本への留学や就職により、日本語も技能も習得した成功者たち。日系のベトナム支社を任された若きベトナム人社長に、本誌で取材をさせていただいたことがあります。そしてNganの場合は大学から選抜でインターンとして行くので、技能実習生ではありません。彼女に「将来、何を望むの？」と聞くと「お金持ちになりたい」と答える。「ずっと雇われのままだと、お金持ちにはなれないわよ」と言うと、「大丈夫。私、会社持ってますから」。頼もしい。どこの国であっても、自分の運命は自分で切り開いてゆくしかないのかも知れません。「1年後にまた【蔵】に戻って来て良いですか？」と聞く。「もちろんよ」と、私。そして心の中ではこうも思っている。

「1年後に戻って来て、まだ日本を好きでいてくれますか？」



月森砂名(つきもりさな)

奈良県出身。同志社大学卒業。2015年、ベトナム初の角打ち【日本酒で乾杯!】に続き、2020年、Pham Viet Chanhにて日本酒専門の「角打ちのある酒屋」【蔵 KURA】をオープン。経営に携わる。東京で舞台撮影や制作の仕事をする傍ら、作家活動を行う。2009年よりNPO法人Layer Boxにて、日本の伝統文化について、大学、高校、専門学校とともに、PV、3D、CGなどのコンテンツ制作および世界発信を行う。